



さとのかぜ

No.177号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2011年10月1日発行

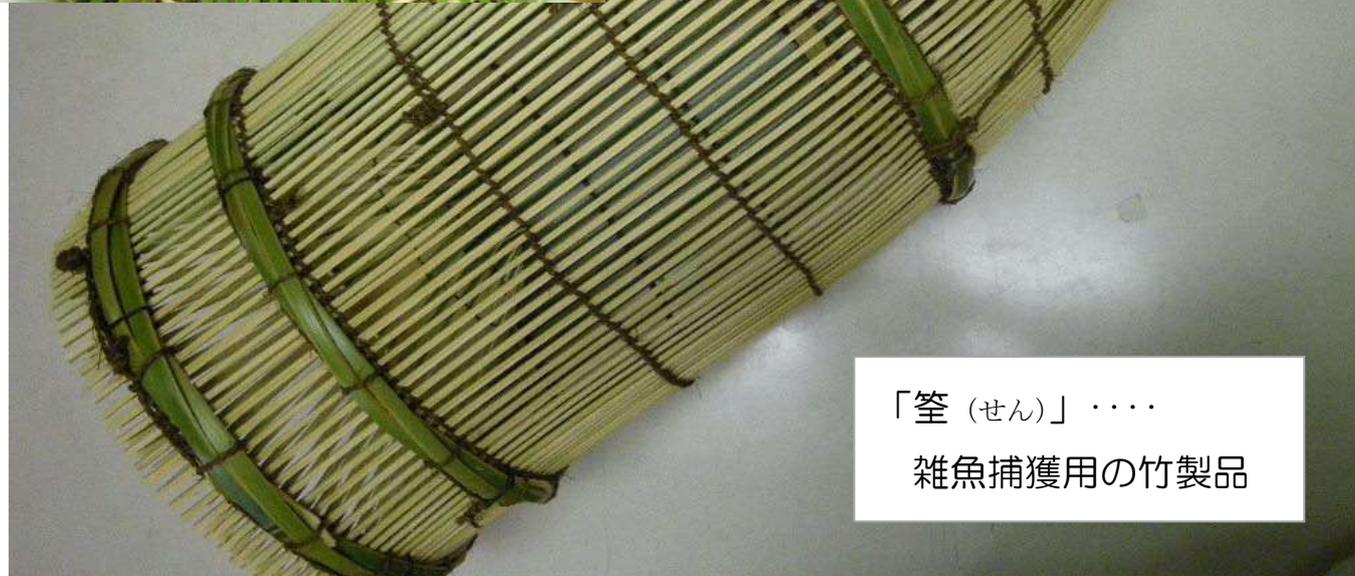
編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (財)千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>



「筥 (せん)」……

雑魚捕獲用の竹製品

竹は、イネ科タケ亜科に分類されますが、タケ科に独立させる人もいます。一般に、タケは生長すると竹の皮が脱落することで、ササと区別しています。古来、竹は多岐にわたる用途に用いられてきました。

写真は、竹かご教室の講師をしていただいている方に制作していただいた「せん」という漁具です。昔ながらの魚を捕まえる道具で、「ドォ」、「ウケ」「ズ」などと言ったりもします。竹の生活道具には、さとの知恵と、繊細な構成・構造美が凝縮しているように感じます。今年の竹カゴ教室は、入門編と応用編を開催いたします。

目次 1・竹細工 2・23年度の米作り 4・センターの畑 5~6・夷隅川流域よもやま話⑥ 7・地球環境問題⑥
8・センター内水路の淡水エビ 9・菜の花の栽培 9~11・行事報告・行事案内 12・センターの生き物

23 年度の米作り

稲が日本で作られるようになったのは、いまから約 2000 年前の縄文時代の末から弥生時代といわれています。このころから米は主食となり、日本人の大切な食料となっています。

稲は熱帯地方で生まれ、寒さに弱い植物です。日本の夏は暑く、稲が生育するのに適しているのですが、春先や秋の寒い時期には適していません。そこで長い間をかけて品種改良を行い、日本の風土に適した稲作が行われてきました。



夷隅地域は古くからの稲作地帯で、美味しい国吉米（現在の夷隅米）の生産で知られており、現在でも農業の生産物は稲作が中心となっています。例年、8 月上旬から稲刈りが始まり 9 月初頭のころには出荷が終わる早場米の生産地として知られています。こうした地域の特性を受けて、センターでは開設以来米作りを続けています。

23 年度の米作りは、まだ寒風が肌を刺す 2 月下旬にくろ切り（畦切り）を始め、くろ練り、くろ寄せを行い、3 月中旬にくろ塗りを行いました。くろ塗りは田んぼに保水するための大事な工程です。今では機械を使用するようになりアツと言う間にくろ切り、くろ塗りを行ってしまいます。センターでは昔からのやり方で鍬を使い、手作業で行っています。この作業は前かがみで行うため大変きつく、腰が痛くなり 2~3m 塗っては腰を伸ばし伸ばしながらの作業です。

くろ塗りが終わりますと、万木堰から引いた水を田んぼ全体に張ります。その後、耕運機で 3 回程度全体を耕し、3 月下旬に荒代かけを行いました。ウグイスの音が盛んになる 4 月中旬に元肥料（コシヒカリ化成）を 40 kg 施し、耕運機で代かきを行いました。代かきは、田植前に行うもので田んぼの土を平らにし、水を均一に張るために行います。この田んぼ全体を平らにすることは、なかなか難しい作業です。こうして田植を待つばかりとなりま

したが、田植まで田んぼに常に水が有るように毎日見回り行いました。ここからはくろに穴をあけ、水漏れの原因となるアメリカザリガニ、モグラとの戦いとなります。

5 月 1 日（日）、遂に田植えの日を迎えました。天候は曇り、気温 18℃、風速 3m/s で雨の心配をしながらの田植となりました。参加者は初めての方、ベテランの方、小学生から大人まで、東京や千葉市、いすみ市などから 29 名（大人 19 名、小人 10 名）の方々が参加されました。皆さん素足で田んぼに入り、9 時 30 分から 2 時間をかけてコシヒカリ 864 m²を植えました。本年度の作付総面積は 1,717 m²で、内訳はコシヒカリ 1,296 m²、京都神力 234 m²、月見モチ 187 m²でした。参加者から貴重な体験が出来た、また来年も参加したい等の声が多数聞かれました。



田植が終了し、稲刈りまでの管理はセンター職員が行います。この管理の出来具合で米の収量が決まります。水の管理、肥料の管理、雑草の管理、そして天候となりますが、天候はいかんともしがたく正に天まかせとなります。

6 月の中旬から下旬にかけて、水を干す中干しを行いました。中干しは稲の根張りを良くし、強い稲を作るためなので手抜きが出来ない工程です。7 月 10 日親穂（おやほ）の幼穂長（ようほちょう）が 1.0 cm 位になりましたので、穂肥（ほごえ）を 30 kg 施しました。穂肥は品質、収量の向上につながるとともに、良食米を生産する上での大切な作業です。7 月下旬に出穂（しゅすい）となりました。2 日くらい低温の日が続き心配されましたが、低温障害は見られず、ほっといたしました。

しかし今年は、福島原子力発電所からの放

射能性セシウム等の汚染が問題となり、予備検査・本検査を行い基準値以上は出荷出来ない事態になりました。注視していたところ、8月に入り、いすみ市内の米からはセシウムは検出されなかったと発表されて、よかった、よかったと胸をなでおろしました。

8月は、暑い暑い日々が続き今度は高温障害が心配されましたので、水を切らさないように管理を続けました。ここで最も心配していた事が起こりました。それはイノシシ君の登場です。3夜連続の登場となり、田んぼの中で転がったり、稲穂を食べたり自由気ままやられてしまいました。昨年も稲刈り前に荒らされたので、今年ももしかしたらと心配していましたが招かざる客となりました。

稲刈りまでの対策として、トウガラシを刻んだものをまいたり、テグスを田んぼの周りに張ったり、案山子（かかし）を置いたりしました。他にも、夜間になると自動的に点滅するライト 2 器を田んぼの周りに設置しましたところ、多少功を奏したようでした。

9月10日（土）遂に稲刈りです。午前9時、快晴、気温 28.8℃（日中最高 31.5℃）、風速 2m/s の天候の中で熱中症を心配しながらの稲刈りとなりました。参加者はいすみ市内3名、千葉県内 23 名、東京 6 名、4 歳から大人までの 32 名の参加となりました。キャンセル待ちとなられた方(14名)には、大変残念でした。



まず、鎌の取り扱い方、稲束の結束方法などの説明後、田んぼに移動し稲刈り開始です。初めての方は、稲束をわらで結束する「ワラ結び」が難しく苦勞しておりました。途中でコンバインの試乗を行い、子供達は嬉々として乗っておりました。参加者の皆さんは汗だくとなりながらも 2 時間でコシヒカリ 432 m²を刈取りました。刈取り後、オダカケに稲束をかけて作業終了となりました。また、

昼食前には昔の農機具である千歯扱き、足踏み脱穀機、唐箕の体験をしていただきました。

参加者の皆さんからは、貴重な体験が出来てよかった・子どもたちがコンバインに乗れたこと・昔の農機具の体験ができた・子どもたちのよい学習となった等々の意見が寄せられました。

昼食には、山形県出身の職員が名物の芋煮を作り、お出ししたところ大変好評を得てにんまりの笑顔でした。心配された熱中症、怪我もなく無事に終了し職員一同ほっといたしました。



午後からは職員、ボランティア総出で京神の稲刈りを行いました。こちらは、お飾り用のワラになるため、全て手刈りで行いました。

23 年度の米の作況指数は全国で 101 の「平年並み」でした。7 月上旬から天候に恵まれて生育がおおむね順調に推移したため、南房総では 102 の「やや良」であると発表されました。センターでは稲刈り後の 9 月 14 日には、コシヒカリ、月見モチの初摺りを支援者の家で行いました。収穫量はコシヒカリ 439 kg（約 7.3 俵）で昨年より 14kg の減収、月見モチは 50.5 kg、昨年より 5 kg の増となりました。

減収の原因としては、イノシシによる食害のほか、元肥の量、田植後の水不足のため、分けつ不足や雑草の除去不足であったと思われますので、来年の米作りに生かしたいと思えます。

収穫したコシヒカリは田植、稲刈りに参加していただいた方々に少量ですがお分けし、月見モチは 12 月 17 日開催の「米作り 4・もちつきをしよう」に使用いたします。京神のわらは、「米作り 3・わら細工を作ろう」、「米作り 5・お飾り作り」や、ワラ縷（な）いに使用します。これらの行事にも、ぜひ御参加下さい。お待ちしております。

センターの畑(春先～初夏植付野菜その後)

3月初旬～6月初旬のネギまで12種の野菜をイベント材料、生長観察、収穫体験等の目的で栽培しました。収穫体験では、トマト、ピーマンが豊作でしたので、収穫時期に合わせて来客者の方々に、もぎ取りをして頂きました。奥様や子供達には好評でした。



12種の野菜のうちの3種、落花生、赤じそ、茶綿は今回初めて栽培したので、それらについて報告します。まず、落花生ですが“千葉半立”という品種を6月初めに植付けました。キジバトやセンター在住2羽のカラスによる食害から種を守るため、発芽後まで防御ネットをはりました。



6月下旬から次々と黄色い小さな花が咲き出しました。花が咲いたのだからそこに実が生ると思うでしょうが、そこが落花生の落花生たるところ。実(み)は地中で生長するので。これって知らない人が意外に多いんです。花の咲いたところから子房柄がのび地中にもぐります。地中にのびた子房柄は横にのびて



ひょうたん形の実が生ります。

10月に収穫を予定していますが、カラスとイノシシによる食害が心配です。聞くところによるとイノシシは落花生も大好物だとか、サツマイモ、イネはすでに食害にあいました。次は落花生が狙われるのかな？地中から引き抜いた子房柄の先には実が生ってきました。



赤ジソは、10月のイベント用(草木染)に栽培したのですが、種蒔きを繰り返すこと3回目でやっと発芽しました。赤ジソの種は小さくて軽くすぐ風で飛ぶため種蒔後の覆土を多くしました。種袋には、種蒔時の注意事項として“種蒔後の覆土は殆どしなくてよい、板で押す程度でよい”と書いてありました。このとおりやらなかったのが敗因のようです。3回目の種蒔きは半ばやけくそで畝に種をバラ蒔き、水をかけておいたら発芽しました。荒療治のほうか赤ジソには良いようです。勉強になりました。



茶綿は12月のイベント用(リース作り)として栽培しました。去年は白綿のみでしたが、今年は茶綿も植えました。茶綿にはどんな花が咲くのか期待していたのですが、白綿とほとんど同じでした、茶色の花を期待していたのですが、残念。でもリース作りには白綿も茶綿も十分量収穫できそうです。イベントへの参加お待ちしております。

■夷隅川流域よもやま話—その6・植生②—

前号に引き続き、夷隅川流域における植生の話です。

・夷隅川流域の潜在自然植生

潜在自然植生図(宮脇編 1986)で、夷隅川流域の部分をながめて見ると、おおむね以下の表のように植物群集が分布しています。

潜在自然植生図夷隅川流域の群集名と分布場所

群集名	分布場所
ホソバカナワラビースダジイ群集	海岸沿い低地・斜面下部
ヤブコウジースダジイ群集	房総丘陵中部・下部
シキミーモミ群集	房総丘陵上部
マサキートベラ群集	海岸風衝低木林
オニスゲーハンノキ群集、クサヨシーハンノキ群集	河川・河川沿い低地
ボタンボウフウ群団	海岸断崖地草本植生
ハマボウフウクラス	砂丘植生

最も多いのは8割近くを占めるヤブコウジースダジイ群集で丘陵中部下部に分布しています。海岸沿いにはホソバカナワラビースダジイ群集が、そして夷隅川河川沿いでは、オニスゲーハンノキ群集、クサヨシーハンノキ群集が分布しています。



潜在自然植生図夷隅川流域部分

・昔の植生

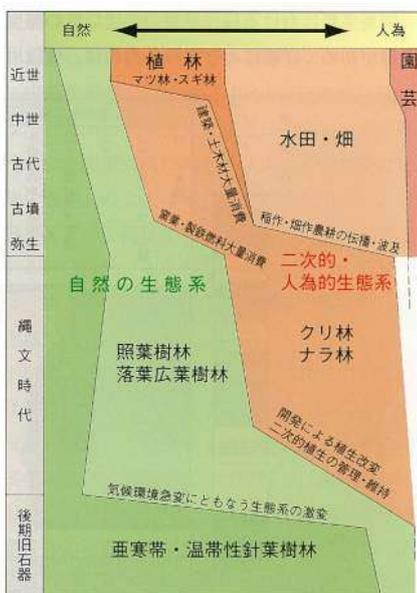


図2-19 旧石器時代以降の植生と人間の活動とのかわり

旧石器時代以降の植生は人間活動の影響を受けながら変化してきました(左図参照)。

少し昔の植生を知る手がかりとして、明治期の陸軍参謀本部測量局が作製した「迅速測図」

というものがあります。この図では、土地利用を20種類に分けて表現しています。この区分からも、森林草地と当時の生活の関わり合いが密接であったことがわかります。森林草地は、用材、薪炭材、日用品材、屋根葺き材と、その用途ごとに区分されています。

参考

1	常緑広葉樹林	11	放棄畑
2	落葉広葉樹林	12	水田
3	マツ林	13	放棄水田
4	スギ林	14	茶畑
5	混交林	15	桑畑
6	低木林	16	市街地
7	竹林	17	裸地
8	草地	18	水生植生
9	ススキ草地	19	開放水系
10	畑	20	その他

明治期の房総半島の植生は、現在よりも人が森林を燃料の薪炭として大変よく利用していたため、樹高が低く、疎林が多く、林床まで光が通るような過度に利用されていた状態であったといえます。

・現在の植生

25年前と少し古くなりますが、現存植生図(宮脇編 1986)では、以下の表のように植物群集が分布しています。

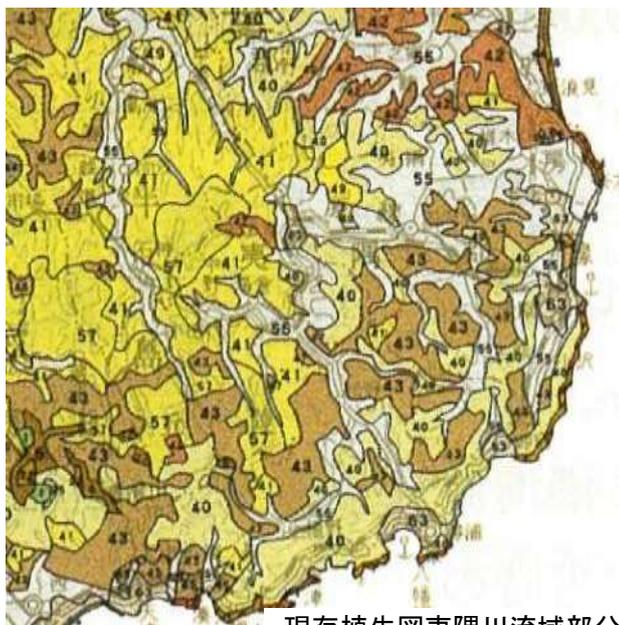
現存植生図夷隅川流域の植生区分と分布場所

植生区分	分布場所
自然植生	
マサキートベラ群集 (7)	海岸沿い斜面地
代償植生	
シイ・カシ萌芽林 (40)	丘陵部、海側
クヌギ・コナラ群集、オニシバリーコナラ群集 (41)	丘陵部
ヤマツツジ・アカマツ群集 (主にアカマツ植林) (42)	丘陵部、流域北部九十九里側 (2011 現在はマツクイムシによりほぼ壊滅)
スギ・ヒノキ・サワラ植林 (43)	丘陵部
ススキ群団・シバ郡団 (49)	大多喜に僅か
ウリカワーコナギ群集、コブナクサ群落 (55)	河川沿い、水田平坦部
クレーコナラ群集他 (57)	丘陵標高 200m 付近
市街地 (63)	

※()番号は、図の凡例を示す

シイ・カシ萌芽林、スギ・ヒノキ・サワラ植林、クヌギ・コナラ群集、ウリカワーコナギ群集などが主要な植生となっています。

最近では、平成17年から整理された「第6回・第7回自然環境保全基礎調査植生調査」をネット上で閲覧することが可能となり、2



現存植生図夷隅川流域部分

万5千分の1地形図にのせた最近10年ほどの詳細な植生図を見ることができます。図版名は、安房小湊、上総中野、大多喜、勝浦、御宿、国吉、上総大原、上総長者です。

夷隅川流域のエリアに出現する主な植生について、同じように分布場所と共にまとめると以下の表のようになります。

植生図夷隅川流域の植生区分と分布場所

植生区分	分布場所
シイ・カシ二次林	丘陵地。(近年、人手の入っていない常緑広葉樹林地)
スギ・ヒノキ・サワラ人工林	丘陵地。(多くは戦後に植栽された針葉樹林)
シキミーモミ群集	大多喜町丘陵最上部
クヌギコナラ群集	大多喜町丘陵中・上部
竹林	大多喜町、他各地に散在
メダケ群落	夷隅川河川沿い 中流・下流
ヤナギ低木群落 ヤナギ高木群落	夷隅川河川沿いに散在 上流・中流
ヒルムシロクラス	太東周辺の堰
タブノキ・ヤブニッケイ二次林	岩船周辺海岸
マサキトベラ群集	太東、大原の海岸沿い
イソギクハチジョウススキ群集	勝浦・大原・太東の海岸崖地
クロマツ植林	和泉浦、日在浦
砂丘植生	夷隅川河口干潟沿い
畑雑草群落	
水田雑草群落	
牧草地	実谷、須賀谷
緑の多い市街地	
ゴルフ場・芝地	大多喜、御宿、国吉

流域北西部などの流域上流部には、落葉広葉

樹林の植生が、流域下流部と海岸沿いには暖地性の海岸植生が見られ、夷隅川流域には大変多様な植生が存在しています。

・センター周辺の植生

流域全域や各所については、興味をもたれた方は Web サイトを覗いていただくことをお勧めします。試しに、当センター周辺の植生図を切り取って掲げてみます。



周辺の丘陵地の植生は、主にはシイ・カシ二次林(15)でおおわれ人工林であるスギ・ヒノキ・サワラ植林(42)が部分的に散在しています。丘陵地下部平坦部は水田雑草群落(b)が広がり、蛇行する夷隅川沿いには、メダケ群落(23)がつながっていて、一部はヤナギ低木群落(13)となっています。畑雑草群落(a)、緑の多い住宅地(i)、工場地帯(L)も散在して見られます。竹林(50)は小面積に3箇所点在しています。丘陵谷戸奥に、農業用水堰である開放水域(w)が数箇所見られます。センター駐車場・建物・水田・畑は畑雑草群落(a)として、奥の湿生生態園は水田雑草群落(b)として表記されています。ヤナギの水没林はシイ・カシ二次林として扱われ、そこまで細かくは表記されていないようです。

これらの植生図は、現地踏査と航空写真を素に作られています。さらにこのごろは、衛星による空中写真も簡単に Web サイトから覗くことができる時代となりました。巨樹の姿や自分の家をはっきり見ることもできます。これら植生図と衛星写真を照らし合わせると、最も新しい詳細な植生の様子を個人でも簡単に読み取ることができますね。

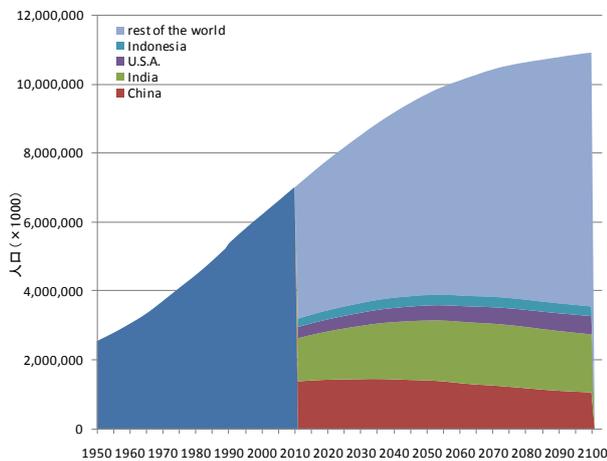
[参考]千葉県の自然史 本編1、本編5、第6回・第7回自然環境保全基礎調査 植生調査2次メッシュ情報 Web サイト www.vegetation.jp/miru/5240/

地球環境問題のいろいろ ⑧～地球の人口～

エネルギー問題や水問題は以前に書きました。以下、人口に関するいくつかのデータを示します。下の表は紀元前から第二次世界大

年次	推計人口 (100万人)
紀元前7000～600	5～10
西暦元年	200～400
1650	470～545
1750	629～961
1850	1,128～1,402
1950	2,529

戦終了直後までの推計人口です。1650年を5億人とすれば現在までの350年間でおよそ14倍にもなっており、18世紀の産業革命後に急速に世界人口が増加したことが理解できます。そして1950年以降2010年までの人口の推移と、その後2100年までの予測は下図のとおりです。



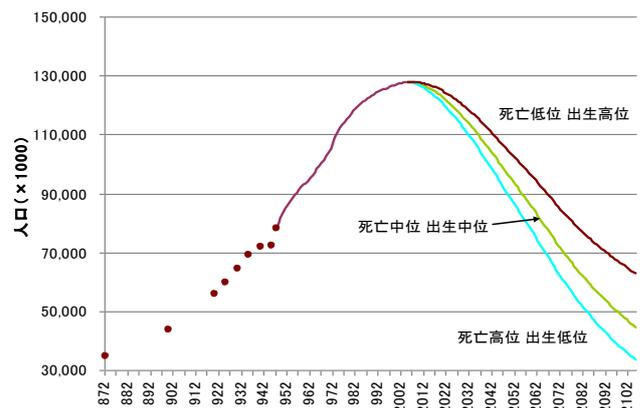
1950年の地球人口はおよそ25億人、2011年には70億人を、2100年には100億人を超えると予測されています。2010年からはグラフを塗り分け、下から中国、インド、アメリカ、インドネシアと残りの国々としました。この4か国は2010年時点での人口上位4か国です。現時点では中国が世界一の人口大国ですが、2030年代には人口減少局面へ移行していきま。また、その地位も2020年代にインドに明け渡します。一方インドでも2060年代には人口減少局面へ移行すると予測されています。4位のインドネシアも2050年代には人口減少局面へ、しかし3位のアメリカは順調に人口を増加しています。世界一位と二位の国が減っているのに、全体で増えているのはナイジェリア、タンザニア、パキスタンやコンゴなど、いわゆる新興国の人口増加に由来しています。

翻って日本の人口はどうなっているのでしょうか。関ヶ原の戦い以降、世の中が安定

すると人口は増えていますが、長い鎖国が続いた江戸時代はおおむね3,000万人で安定していたようです。

年次	人口 (1000人)	年次	人口 (1000人)	年次	人口 (1000人)
縄文早期	20.1	725(奈良)	4,512.20	1721(享保)	31,278.50
縄文前期	105.5	800(平安)	5,506.20	1786(天明)	30,103.80
縄文中期	261.3	1150(平安)	6,836.90	1792(寛政)	29,869.70
縄文後期	160.3	1600(慶長)	12,273.00	1846(弘化)	32,297.20
弥生	594.9				

1872年以降の人口の推移と将来予測は下図のようになっています。ご承知のように日本の総人口は2007年の127,771千人をピークに減少局面に入っています。将来人口は2006年に100年先まで、死亡率を高位、中位、低位、出生率も高位、中位、低位で9通りの予測が出されていますが、最も低い予測では2105年には幕末期程度の人口にまで減少すると考えられています。減少する人口は、日本の将来にとって明るい要素になるのでしょうか。



地球温暖化問題は現時点で地球の最大の懸案事項でしょう。その原因が温室効果ガスにあるとすれば、エネルギー問題に行き着きます。世界の人口は石炭という化石燃料を得て産業革命を成功させ、安定し拡大する生産は豊かな暮らしや快適さ・便利さをもたらした。その結果として人口増加をもたらしました。エネルギーを得て豊かで快適な社会を望むことを否定することは、だれもできないでしょう。途上国の人口はこれからも、経済の発展とエネルギー消費の増加に伴い増加し、食糧問題や水問題への対応を強力に求められることとなるでしょう。

【参考】

- 1.国立社会保障・人口問題研究所WEBサイト
- 2.UNDP: World Population Prospects: The 2010 Revision

センター内水路の淡水エビ

センター施設は谷津田の奥の水田地帯などを造成し設置されており、農業用利水のための「万木堰」が背後にある。

この堰は下流に広がる水田用のものであり、センターでも水田耕作、昆虫広場回りの小川や、湿性生態園の水路にもこの堰水を導水し利用している。センター流域の丘陵地の森に降った雨水も水路に流入する形となって、最終的に夷隅川に流れ出ている。

この水路にはゲンジボタルが生息し、ホタル観察会や生き物調査として「ガサガサ」遊びの場として利用している。

水路内に子供たちを入れて「ガサガサ」をしている中で確認できた生き物としてはマツモムシ、タイリクバラタナゴ、モツゴ、ドジョウ、メダカ、ヨシノボリ、淡水エビ類、モクズガニ、カワニナ、タニシ類、シジミ類であった。このうち淡水産エビ類では、スジエビ、テナガエビの2種と、海とつながる生活史を持つ両側回遊型のヌマエビ（亜種ヌマエビ。額角の形態のみで判別）が、センター内水路で確認されている。



スジエビ



ヌマエビ

これらのエビ達は、海からここセンター水路にたどり着くまでには様々な困難を押ししての大変な旅をしたことになる。また、センター水路内では確認できていないが周辺2~3km圏

の小河川上流部にはヤマトヌマエビ、ヒラテテナガエビ、トゲナシヌマエビを確認している。こうしたエビ達がどのような環境を求めているのかについては調査・研究文献も少なく定かではないが、私見ではこれらエビ類の確認できた場所に共通しているのは、谷津奥にかろうじて残された人の手の入らない良好な環境を今に保つ、とても貴重な場所だと言える。特に、ヤマトヌマエビとの出会いは、まさに絞り水を集め川の始まろうとするような水源地付近が多い。つまり、これら淡水エビ達の生態を知ることは、地域の自然の状態がみえるということでもある。近年、エビ達との出会いは少なくなったが、指標生物としても、大切なお付き合いをしたいものである。

なお、千葉県で確認されている淡水エビ類は、次の通りとされている。

科	属	種
ヌマエビ	ヌマエビ	ヌマエビ ヌカエビ
	ヒメヌマエビ	トゲナシヌマエビ ミヅレヌマエビ ヤマトヌマエビ ツノナガヌマエビ ヒメヌマエビ
	カワリヌマエビ	ミナミヌマエビ
テナガエビ	スジエビ	スジエビ
	テナガエビ	テナガエビ ミナミテナガエビ ヒラテテナガエビ コンジテンテナガエビ
アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ



テナガエビ

[参考]
新島偉行(2001)千葉県生物誌, 51(2), p. 59~81

菜の花の栽培 —菜の花エコプロジェクト 2010～2011 の総括—

菜の花エコプロジェクト(No.169 参照)では、6月9日に菜の花の収穫をした後、二週間の追熟・乾燥を行い、6月26日に鞘をはたいて種を採取しました。栽培面積約 340 m²に対し、収穫できた菜種の重量は約 38.5kg と昨年同様でした。唐箕でゴミやほこりを取り除き、その種の



一部を使っての搾油デモンストレーションを7月16日に行いました。種は、NPO バイオライフの竜ヶ崎にある機械にて搾油していただきました。今年は刈り取ったなたね束を立てたまま乾燥熟成させました。黄金色のなたね油が出来上がりました。結果として、13ℓの油が収穫できました。搾油性能の良い機械のおかげで、種の重量に対して 31%という、なかなかの油の収穫率となりました。

《 行事報告 》

7月23日

海辺の植物観察



大人8名の参加がありました。

雨の天気予報は出ていなかったのですが、太東海浜植物群落に到着すると、雨が降り出し、その後も降ったり止んだりして海辺の横風と雨の中での観察会となりました。

太東海浜植物群落の碑は、3月11日の津波によりなぎ倒されたままでした。植物群落におきた、津波の影響なども同時に観察いたしました。

スカシユリ、ハマヒルガオ、ボタンボウフウ、ハマオモト、イソギク、コウボウシバ、オカヒジキなどたくさんの海浜植物が観察できました。

7月30日

夏の星座観察



大人10名、子供8名の参加がありました。

星を観察するには雲が厚過ぎて、あまり星を観察することはできませんでしたが、土星の輪を実際に観察することができました。

星が全く見えなくなるまで雲が広がってしまったので、野外の観察を切り上げ、PCによる星空のシミュレーションプログラムや配布資料を用いた天文解説、来年の金環食のお話などを講師の方にいただきました。「星が少ししか見えなかったけれど PC を使った説明は分かりやすく面白かった」といった声が救いの行事となりました。

8月6日～12日

ミニプログラム スペシャルウィーク “さとの夏遊び”



期間中、延べ人数 160 名の参加がありました。

今年初となる試みで、1週間日替わりで様々な行事を行いました。

工作系では、水でっぽう、紙でっぽう、竹とんぼ、竹馬作り、牛乳パックを使った紙すき体験を行いました。自然体験では、トンボ探検隊、水辺の生き物探検隊と称して、トンボを捕まえたり、水路に入って水辺の生き物を自ら捕まえたりしました。

熱中症や怪我も無く、大変好評な行事となりました。

8月20日

トンボの沼のトンボを見に行こう



参加者は、天気予報が小雨のためか、当日キャンセルが続き、残念ながら大人1名の参加となりました。

少々肌寒い気温で、あまりトンボが盛んに飛ばなかったのですが、シオカラトンボ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ナツアカネ、ノシメトンボ、アジアイトトンボ、アオモンイトトンボ、計7種類のトンボを観察できました。

観察できたトンボの頭数は少なかったのですが、トンボ観察に適した天気や、詳しい生態等をじっくり解説できたので、内容としては満足していただけただけようです。

9月10日

稲刈り体験をしよう



大人22名、小人10名、計32名の参加がありました。風も微風で大変暑い中での作業となりましたが、皆さん鎌を持ち、430㎡の田の稲を刈り取っていきました。刈り取った稲はワラで束ね、昔ながらの天日で乾燥させるオダカケの実演を行いました。

稲刈りの後は、千歯扱き、足踏み式脱穀機を使った、昔ながらの脱穀体験を子どもたちは行いました。「昔の道具は面白いけれど大変!」といった声が聞こえてきました。

苦勞の末のお米の味は、きっと美味しいことでしょう。

9月23日

いも掘り・焼いもにチャレンジ!



大人12名、小人7名、計19名の参加がありました。少々厚い雲が空に広がっていましたが、その分すこしやすくて農作業日和の中での開催となりました。

まずは、焼いもに使う「燻炭(くんたん)」の準備をしました。モミガラや黄色い部分が、全体的に真黒になったら「燻炭」の完成で、焚き火で言うところの「おき火」の状態になります。いもを濡れ新聞とアルミホイルにくるんで、燻炭の中に入れます。ほぼ一時間で、ほくほくで甘くておいしい焼いもができあがりました。

美味しい〜と皆さんに大好評でした。

☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

これからの行事案内

10月 (8月1日から受付開始)

●草木染め体験

8日(土)10:00~15:00 定員20名 雨天順延9日
自分でデザインをして、シルクの布を自然の色で染めてみましょう。



参加費:1500円

持物:剪定バサミ、作業できる服装、弁当、飲物

●竹かご教室(入門編)①②③④

10月29日(土)、30日(日)、11月3日(木)5日(土)
10:00~16:00 定員20名

竹取り、ひご作りから始めて、4回終了までに完成させましょう。

参加対象:高校生以上 全4回参加できる方

参加費:500円

持物:竹用ナタ、竹ひきノコギリ、植木ばさみ、膝あて、軍手、弁当、飲物

※応用編と両方の参加はできません!



11月 (9月1日から受付開始)

●竹かご教室入門編③④

11月3日(木)5日(土)10:00~16:00 定員20名
 ※10月からの連続講座です 11月分のみ申込はできません。

●竹かご教室(応用編)①②

11月26日(土)、27日(日)10:00~16:00
 定員10名 全2回開催
 竹かごの色々な作り方を学びましょう。
 参加対象:高校生以上 全2回参加できる方

参加費:500円

持ち物:竹用ナタ、竹ひきノコギリ、植木ばさみ、軍手、膝あて、弁当、飲物

※10月開催の入門編と両方の参加はできません



●第15回さとの文化祭

小学生の作品をはじめとした様々な作品がセンターに飾られます。

《期間》

11月15日(火)~23日(水) 9:00~16:30

※21日月曜日は休館日です



1月 (11月1日から受付開始)

●そば打ち体験

1月15日(日)10:00~14:00 定員18名
 そばを自分で打って皆で味わいましょう。

参加対象:中学生以上

参加費:1000円

持ち物:ボウル(約30cm)、割烹着、手ぬぐい、タオル、寒くない服装



●冬の星座観察

1月21日(土)17:30~19:00 定員20名
 オリオン星団など冬の夜空の星座観察をしましょう。

持ち物:寒くない服装



●つるでかごを作ろう

1月29日(日)10:00~16:00 定員20名
 つるを使ってかご作りをします。
 山に入って自分でつるも取りに行きます。

参加対象:中学生以上

持ち物:鎌、剪定バサミ、軍手、長靴、山に入れる服装、雨具、弁当



12月 (10月1日から受付開始)

●米作り3・わら細工を作ろう

12月4日(日)10:00~15:00 定員20名
 わらを使って、昔ながらのわら細工を作りましょう。
 参加対象:中学生以上

参加費:100円

持ち物:植木ばさみ、座布団、寒くない服装、弁当

●つるでリースを作ろう

12月10日(土) 10:00~16:00 定員20名
 雨天延11日(日)
 つるを使ってリース作りをします。山に入って自分でつるも取りに行きます。

参加費:100円

持ち物:鎌、剪定バサミ、軍手、長靴、山に入れる服装、弁当



●米作り4・もちつきをしよう

12月17日(土)10:00~14:00 定員30名
 雨天順延18日(日)

つきたてのお餅を味わって、お正月の丸餅を作りましょう。

参加費:一家族500円



●米作り5・おかざりを作ろう—鳥居形編—

12月22日(木) ①9:00~12:00 ②13:00~16:00
 2回 各定員20名

鳥居形のお正月注連(しめ)飾りを作りましょう。
 初心者向き。

参加対象:中学生以上

参加費:500円

持ち物:工作ばさみ、座布団、寒くない服装

●米作り5・おかざりを作ろう—輪飾り編—

12月23日(金) ①9:00~12:00 ②13:00~16:00
 2回 各定員20名

わらを使って、お正月のおかざり(輪飾り)を作りましょう。

参加対象:中学生以上

参加費:500円

持ち物:工作バサミ、座布団、寒くない服装



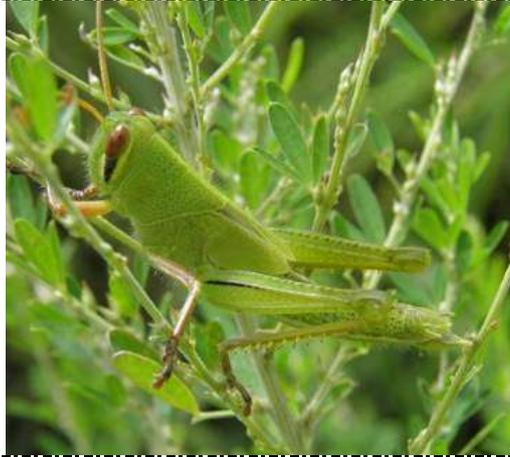
第2回いすみ環境と文化のさと

写真コンテスト

- ・応募期間:2011年10月1日~12月4日
- ・さとの環境部門、さとの生活文化部門
- ・詳しくは、ホームページまたはセンターへ



センターの生き物たち



ツチイナゴ/イナゴ科

体長はオス 40mm、メス 47mm 程の大型のバッタです。幼虫は鮮やかな緑色をしていますが、成虫は土のような体色になります。丈の高い草の間に生息し、センターでは、メドハギに鈴なりに集まっているのが見られます(写真は幼虫)。昆虫広場を歩くと、音を立てて飛んでいく場面に頻繁に遭遇します。

10月頃に成虫になり、そのまま草の茂みなどで越冬し、翌年の春に活動を再開します。草が茂っているところには緑色の体色、枯れるところには土色の体色と、保護色を使い分ける優れたイナゴです。



ミゾソバ/タデ科

あぜや休耕田、水辺などで大群落を作る1年草です。ソバの花に似て、溝に生えるのでその名がついたそうです。夏の終わりから秋にかけて、小さな花が固まってつきまします。花は白で、上部がピンク色に染まり、とてもかわいらしいです。

センターでは、秋にかけて田んぼの水路やその縁で見られるほか、湿性生態園では一面に広がる大群落を見ることができます。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

いよいよ10月です。夏まではセンター行事もアウトドア傾向が強かったのですが、これからは室内での行事も増えていきます。もっとも、材料の調達やはりアウトドア、この工程が意外に人気があるのです。自ら山に入り、竹を切りだしたりツルを調達したりします。

わら細工は9月に刈り取った稲わらを使います。もしかしたら、稲刈りに参加された方がわら細工にも参加するかも。そうすれば、まさに自分で材料を調達するようなものですね。

センターの行事は田植えから刈取り、そして稲わらの利用、竹林やつる植物の有効利用など、いわゆる資源循環・循環型社会を視野に入れているのですが、あまり難しいことは考えず、行事に参加してください。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日~翌年1月3日

開館時間：9:00~16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。